

チギリタイムズ

3月号

The Chigiri Times

『此度の報酬改定への違和感』
こたび

事務局主幹兼新施設準備室 宮本 宣之

『私の施設（特養）では「寝たきりにしない・させない」、
「主体性や個性を引きだす」、「これまでの生活習慣をあきらめ
ない」、「その人を知る・変化に気付く」を介護目標に掲げている。

施設における利用者へのケアは利用者を知ることから始まる。問題行動や障害などの出来ないことをチェックするだけでなく、どちらかと言えば出来ることのチェックを重要とし、症状や問題行動も含めた利用者の今の全体的なあり様の背景や必然を理解することに重きを置いている。そのためには、その時々々の言語的なものだけでなく、身体や行動など非言語的な情報も含めた幅広い角度から利用者に向かい合い、現在の状況（身体、心理、生活、家族）、これまでの家族の歴史や、現在を成り立たせてこままでに至ったその方の過去のエピソードなどもキーと考え、実家訪問、お墓参り、普通つた喫茶店、野球観戦等々の外出も積極的に行っている。

介護する側が求められている本質がわかるということ
を繰り返していくなかで、利用者の方との理解を深め、相互性・互恵性の関係性をもって、利用者の方の主体性・個性を引きだす介護に努めている。ただ現実を見ると、介護する側からの見方や価値観を払拭できず、利用者の示す症状や問題に振り回され、介護者・利用者ともに傷ついてしまっているケースも少なからず見受けられる。今以上に介護の目標を浸透させていく必要があると感じている。』

これは、私がある研修に参加させて頂いていた時の課題『職場におけるケアリング』について論じた内容です。

なぜ、恥を忍んでこんな内容を書かせて頂いたかと言うと、平成三十年介護報酬改定の内容があまりにも領けない内容だったからです。国は「介護サービスの質の向上」＝「医療体制強化」との偏った方向性を示しているのではないかと感じられたからです。医療・介護の社会保障制度の中にあつて介護老人福祉施設（特養）は看取りを含め医療体制の強化が求められるのは解ります。しかし、今回の改正は医療費削減のための代替的な位置づけに重きを成し、本来、求められるべき介護の本質を蔑にしている気がして堪りません。

もう一つは、「介護サービスの質の向上」＝「サービス加算の取得」との国の考え方についても甚だ疑問が残ります。今般の改正においても排泄介助に関する加算が創設されました。千両荘も介護目標の実践に向け利用者の方には出来る限りトイレで排泄して頂くように支援しています。しかし、加算と言う名の足枷は、直接の介護現場にとつても多くの付帯業務が課せられ、主体業務である『介護する側が求められている本質がわかるということを繰り返していく』為に必要な時間や、『利用者の方との理解を深め、相互性・互恵性の関係性をもって、利用者の方の主体性・個性を引きだす』為に必要な時間を確実に奪い取ってしまうでしょう。介護の現場では加算取得が介護サービスの質の向上に全てが繋がる訳ではありません。